

宇佐神宮

宇佐神宮は日本の最も重要な神社の一つで、1300 年近くの歴史があります。その主祭神は、国と皇室の守護神として崇拝されている八幡神です。八幡神の神社は日本で最も数が多い神社の一つであり、その数は数万社にのぼり、宇佐神宮がその総本宮となっています。さらに、宇佐神宮は勅使（天皇の使い）を受け入れる資格のあるわずか 17 の神社の 1 つであり、それは皇室との歴史上の繋がりを表しています。

宇佐神宮は、神道と仏教を習合した信仰の形である、神仏習合が発展した最も初期の場所の一つであり、そして大きくて影響力のある神社と寺院の複合体となりました。19 世紀後半に神道と仏教が分離された後、宇佐神宮は完全に神道の神社になりましたが、現在の慣習のいくつかはまだ、その神仏習合の過去を反映しています。研究者たちは、神様を運ぶ移動可能なお社であるお神輿、捕らえられた動物を解放して罪を許す放生会の儀式、二つの屋根がある独特の八幡造りという建築様式など、いくつかの伝統は宇佐神宮から発したものと考えています。

境内

広大な宇佐神宮は小椋山とその周辺にあります。その中心は、山の頂上にある上宮（上の社）と山の麓にある下宮（下の社）です。境内と隣接する丘には、多くの末社や摂社も点在しており、最も奥にある社（「奥の宮」）は、南に約 6 km 離れた御許山にあります。

宇佐神宮境内の大部分は森に覆われており、明るい朱色の御殿、鳥居、橋がよく映える美しい背景を提供しています。いくつかの池とその周辺には季節の花が豊富で、さまざまな野生の生き物の生息地になっています。ある池の隣にある宝物館の展示では、お神輿、御託宣集、彫像、刀、儀式用の道具、さまざまな歴史的文書が展示されています。宇佐神宮は、いくつかの国宝と多くの重要文化財を所有しています。

歴史と祀られている神々

宇佐神宮は3つの主要な祭神を祀っています。その中で最も有名なのは、応神天皇（日本の伝説的な第 15 代天皇）の神格化された姿である八幡神です。八幡神は、母親である神功皇后と、古くから宇佐で比売大神という総称で崇拝されていた海の三女神と共に祀られています。宇佐神宮の記録によると、八幡神は 571 年に小椋山の近くに初めて現れ、自分が日本の守護者となる、と宣言しました。八幡神を祀った場所は何度か変更されましたが、ようやく小椋山の頂上に適度な広さの土地が選ばれ、725 年に御殿が建てられました。

歴史を通して、多くの天皇、貴族、武士の一族の当主、そしてその他の権力者が八幡神に祈りを捧げました。8 世紀、天皇は奈良の東大寺で大仏の建設を見届けてもらうため八幡神を招きました。数十年後、皇位継承の問題について考えられた際、宇佐神宮にて八幡神の御託宣が参考にされ

ました。10 世紀には、朝廷が八幡神に中央政権に対する反乱を鎮圧するよう助けを求めました。13 世紀にモンゴル人が日本に侵攻しようとしたとき、人々はまた八幡神に保護を求め、八幡神が嵐を引き起こしてモンゴル人の攻撃を阻止したといわれています。

八幡神は守護神と見なされていたため、支配階級の者たちにとって八幡神が重要であったことから、八幡信仰は全国に広まりました。宇佐神宮は八幡神の神社の総本宮としてかなりの権力と影響力を持っていたため、ある時には九州最大の地主にもなりました。しかし、政治情勢の変化と武士階級の台頭により、宇佐神宮の立場は弱まり、徐々に支配地のほとんどを失いました。1868 年に天皇の統治が復活した後、政府の令により宇佐神宮を含む複数の神社に高い位が与えられ、そのおかげで宇佐神宮の再興も促進されました。昭和の大造営（1932～1941 年）の時に境内全体が改修され、宇佐神宮は現在の配置と外観になりました。

神仏習合

宇佐神宮は、神道と仏教を習合して崇拝する「神仏習合」の発祥地の一つであると認められており、その神仏習合は仏教が日本に導入された後、8 世紀ぐらいに形になり始めました。そして宇佐神宮は間もなく、神職と僧侶の両方によって宗教儀式が行われる、大きな神社と寺院の複合体に発展しました。境内の主要な仏教寺院は、宗教的および事務的な役割を果たした弥勒寺でした。神仏習合が八幡信仰とともに全国に広まるにつれ、宇佐神宮は、その他の神社と寺院の複合体の手本となりました。神仏習合は何世紀にもわたって実践されましたが、明治政府が 1868 年に宗教の分離を命じました。その後、すべての仏教建造物が宇佐神宮の境内から取り除かれ、宇佐神宮は完全に神道の施設になりました。しかし、宇佐神宮の年中行事の内、特定の儀式やお祭りには、今もその神仏習合のルーツが表れています。